

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Encounter between Christianity and Japanese Religions in Danjo Ebina

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 1983-12-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 關岡, 一成, Sekioka, Kazushige メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2241 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



海老名弾正におけるキリスト教受容

——神観を中心として——

関 岡 一 成

1

この論文は、比較思想史の観点から、異質の外来思想受容に際して生じる諸問題、類型を海老名弾正（1856〈安政3〉年—1937〈昭和12〉年）を通して考察するものである。

海老名のキリスト教受容については、「正統的でない」「神道的、儒教的である」と批判された。また、彼が強調した「日本的キリスト教」も、国家主義的臭いのするものとされた。戦後は、戦争、国家、植民地、天皇に関する彼の思想が、キリスト者として適切でなかったとみられてか、ことさらに無視されて今日に到っている。同時代に活躍した内村鑑三、植村正久、小崎弘道、新渡戸稲造には全集、著作集があるのに、彼等に劣らない量の著作があるにもかかわらず、海老名の著作集は刊行されないままである。

確かに、今日の視点で海老名の著作を読む時、その思想には批判されるべき点も少なくない。しかし、筆者がこの論文で海老名に注目するのは、彼の思想内容もさることながら、明治期にキリスト教を受容した人達の中で、独自の受容方法を取っているからである。

欧米の宣教師によって伝えられた、欧米型のキリスト教を直輸入し、そのまま受容することが正統的であるとされていた時代に、海老名は、欧米型はキリスト教が異なった地、文化において受容された時に生じた種々の受容類型の一つにすぎないとして、日本的類型があってしかるべきと考えた。その

背景には、ギリシア、ラテン、ゲルマン、アングロ・サクソンの文化、伝統に匹敵する内容が日本の文化、伝統にあるとする考えがあったことは言うまでもない。それゆえに海老名は、日本の伝統思想の連続、延長線上でキリスト教を受容した。

海老名は、神儒仏思想の伝統を踏まえて成立する「日本的キリスト教」は、キリスト教の普遍性、純粋性を破壊するものでない⁽¹⁾と確信していた。むしろ、一類型にすぎない欧米型を無批判に受容することこそ問題があると感じていた。

海老名のキリスト教受容の特徴を示す「日本的キリスト教」は、種々の視点から考察できるが、ここでは神観に焦点を合わせることにする。神観を中心にしたのは、一つには、海老名自身が「基督教が日本に貢献する所多々あれども、その最も大なるものはこの神観の思想である⁽¹⁾」とのべていることにある。さらに、もう一つの理由としては、筆者はかねてより、キリスト教と日本の諸宗教の比較から、両者における相違の根本が神観にあると考えるからである。すなはち、キリスト教が唯一人格神を基本としているのに対して、神儒仏思想が多神、汎神的であるのだが、海老名はこの相違をどのように克服してキリスト教を受容したのか、をみたいためである。

海老名がキリスト教の唯一人格神 (God) を「日本的キリスト教」の類型の下に独自に把握するには、キリスト教に出会ってからほぼ20年を要した。彼は自分の信仰を振り返って「一體私の信仰経験は、次第々々に進み来たやうに思はれる。即ち一の實驗があつて、又次の實驗に入つたものである⁽²⁾」と語っているが、神理解についてもいくつかの段階を経て確立されたものである。海老名自身は、そのプロセスを詳細に記していないので断定はできないが、筆者は、大体四期に分けられると考える。

第一期は、故郷柳河藩での幼少年時代である。この時期は、キリスト教に

(1) 海老名弾正, 基督教新論, 警醒社, 1918年, 147ページ。

(2) 海老名弾正, 我が信教の由來と經過, 非売品, 1937年, 60ページ。

出会う前の日本の伝統思想、とくに武士の価値観の中心となっていた儒教によって養われた時代である。この時期は、God 受容の素地が形成された時代といえる。

第二期は、16才から20才の4年間を過ごした熊本での学生時代である。この時期に L. L. Janes によってキリスト教に出会い、受洗し、God を受容した。

第三期は、20才から23才の同志社で学んだ時代である。この時期に本格的にキリスト教の研究を開始し、組織的にキリスト教思想の把握に努めた。さらにこの時代に、失明の恐れのある眼病になり苦悩するという体験から、神観に一段と飛躍がみられた時期である。

第四期は、明治12年から明治20年代末に到る時期である。とくに、明治20年代のキリスト教界の動向が海老名に影響した時代である。すなわち、明治20年代は、内にあっては新神学の導入、外にあっては教育と宗教の衝突問題が生じ、キリスト教界の指導者達が思想的に動揺した時であった。海老名は、親しい友人が牧師職を辞するという状況下で、改めてキリスト教と日本の伝統思想、とくにこの時期には神道思想との調和を見出すことに努めた。明治20年代の終り頃には、彼の受容類型である「日本的キリスト教」は確立したとみてよい。

以下に、この四時期の神観を順を追って辿ることにする。

2

キリスト教に出会う前の海老名の思想を考える時、もっとも重要な点は、彼が武士の家に生まれ、武士の子として成長したことである。明治維新によって武士社会は急速に崩壊したのであるが、彼が幼少年時代に植えつけられた武士魂は終生消えることがなかった。海老名が安易に、あるいは正統主義の名の下に欧米型のキリスト教を直輸入の形で受容できなかった背景には、この武士の自覚があったと言っても過言ではない。

海老名は、士農工商の時代には、支配者である士と支配される農工商の間には、「其性格の差殆んど人種を異にするかと思はしむるものあり⁽³⁾」とのべ、その差異の根本は忠君思想の有無から生じるとしている。

君の祿を食むものは君の為に死すとは、則ち武士の道徳であつたらう。彼の家子郎黨はその君父の家に養はれて居つたものである。大事の場合君家の為にその身を殺すは、則ち大義を立る報恩に外ならなかつた。故に恩顧を蒙らざるものは固より一身を捧げてまでも奉仕する必要はなかつた。是れが武士には忠君の義務ありしと雖も、農工商に至つては藩主とその盛衰興亡を共にせざりし所以⁽⁴⁾である。

武士の子供は、この武士特有の忠君思想を、10才前後で武士の自覚を持つという形で身につけた。海老名によると、子供に武士の自覚を持たせるのには、母親も大いに貢献したという。

母が其子を教育するにも、忠孝の精神を頭から吹き込んだ。今の婦人に比べると實に教育はなかつたのであるが、其子を忠孝の精神に育て上げる所は偉いものであつた。彼等は常に懐剣を以て其子を教育した、げにや既に十歳ならずして君の馬前に斃るべきことを覺悟せしめた⁽⁵⁾。

海老名は、10才の時に母と死別しているが、彼自身それまでに母から機会のあるごとに武士の自覚を持つように教育されたと記している⁽⁶⁾。武士としての教育は徹底したもので、後年幼少時のことを思い出してのべる場合も、武士の自覚を持つこと、とくに忠君思想を「頭の先から足の爪先迄教へられ⁽⁷⁾」

(3) 海老名弾正、帝國之新生命、警醒社、1902年、72ページ。

(4) 海老名弾正、國民道徳と基督教、北文館、1912年、32、3ページ。

(5) 同書、177ページ。

(6) 一例を挙げると。「私は今に忘れない、幼き時に食事の折私の母が突然云へるには、何うだ、彼方に今魚類の賣聲が聞える、此の熱い天氣に魚類を賣つて歩く、川向ふに於いては今や田を植付けて彼の通りに苦しんで居る、夫れに我々は坐ながらにして飯を喰つて居る、お前は如何に思ふか是れは實に祖先の功に據つて君より給はつたる所のものである、我々は今魚類を賣つて歩くでもなければ又田を植付けるでもない、坐ながらにして喰つて居るのは、正かるときには君の馬前で討死をせねばならぬからである、お前は其の覺悟があるかと云はれて、合點をしたことがあります」(海老名弾正、帝國之新生命、104、5ページ)

たと語っている。

海老名がこの時期に身につけた忠君忠孝思想は、儒教思想によるものであるが、彼はそれを自覚していた訳ではない。9才から藩校伝習館に入り漢学を学んだが、読み書きをすることが中心で、思想的に把握するところまではいっていなかった。

この時期の価値観、思想で God 受容の素地となったものとしては、父親の太陽崇拜からの影響なども考えられるが、何とんでも「君の馬前で死ぬ」「忠君」思想である。彼は藩校伝習館で、1才年少の若殿様の読書相手として10人の内の1人として選ばれた時には、「この若殿様のために生命を差上げやうと深く思つた⁽⁸⁾」という。また、「忠君」ということも、「素より封建時代の忠は其範圍が狭い、僅かに其一藩主に限られて居つた。然し狭いだけ又其だけ深いものがあつた、強いものが存して居つた⁽⁹⁾」と高く評価している。

おそらく、武士社会がそのまま存続し、忠を捧げ、生命を差し出す藩主がそのまま存在していたら、彼は God を受容する必要はなかったであろう。ところが、ここに明治維新が生じ、海老名にとっては神であったともいうべき「君」を失なうことになった。当然のことながら、これは彼に非常な動揺を与えた。

忠孝の観念の如きも動揺して來た。私は武家の子であつたから、今迄君として仰いだ相手が無くなり、父母に對する態度すら變つた。同時に四民平等となつた。武士から云ふと百姓町人の如き者が勢を得た結果禮儀も無くなり、美術も壞れた。音楽も壞れた。多年人心を支配した儒教も壞れて、論語孟子は襖の下張りとなつた。これは維新の結果である。其時代に私共は育つた。勢ひ其影響を受けざるを得なかつた。併し破壊だけでは物足らぬ。長い間養はれた為に、忠君の精神的要求がある。何ものか權威が欲しかつた。⁽¹⁰⁾

(7) 「我が信教の由來と經過」58ページ。

(8) 渡瀬常吉、海老名弾正先生、龍吟社、1938年、65ページ。

(9) 「國民道徳と基督教」176、177ページ。

明治維新によって新たに天皇が「君」として登場したのであるが、従来の藩主への忠君をそのまま天皇に代えることができなかった。その背景には、柳河藩の藩士が、薩長土肥の藩士のように国家の中枢にのぼり得る境遇にあらず、多くの者が家禄を失ない時代の流れについていけず、貧窮に落入るといふ現実があった。⁽¹¹⁾海老名は、当時天皇を「君」とできなかったことについて以下のようにのべている。

子の生命を今後、誰に對して捧げるのか、天子に差上げるといふ事は、今なら明白であるが、その頃は一寸明かでなかつた。君の祿を喰む者は、君のために死す。主は、臣に祿を與へるから、忠臣たる者は、生命を主に捧げねばならぬ。謂はゞ、生命と祿との交換であつた。祿を呉れぬ者は、主人でない。皇室は、祿を下さらない。當時の考方では、天子と我々との關係が、未だ明白でなかつた。明治維新後の忠君は、手辨當の忠義である。然るに當時は、眞劍に生命を捧ぐべき相手が無くなつたので、予は淋しさを感じた。一種の悲哀を抱きつゝ予は前途に光明を望む外なかつた。⁽¹²⁾

幼少時からの徹底した教育で、忠君思想は身につけたにもかかわらず、生命を捧げる「君」を失ない、天皇も親もそれに代ることができなかつたところに、次の熊本洋学校時代に God を「君」として受け入れる基盤があつたのである。⁽¹³⁾

3

海老名の隣藩熊本への遊学は、彼にとって人生の大転換となつた。明治と

(10) 「我が信教の由來と經過」53ページ。

(11) 「私は明治維新の轉變が社會人事の上に與へた悲惨の事實を記憶して居る。殊に今までは安らかに君の祿に衣食して居つた武士は、俄に激烈なる競争場裡に突き出され、忽ち其渦中に捲き込まれ手も足も動けなくなつたのである。予が一家及び近隣の家々が日に月に零落荒廢に歸しゆく有様は實に子供作らも哀れに感ぜられた」(渡瀬常吉、前掲書、284ページ)

(12) 渡瀬常吉、同 書、65、66ページ。

(13) 「子供の時教へ込まれた忠君、……其考が、大名の無くなつた為に、對象を失つて居た。親が之に代つて中心になるかと云ふと、そうも行かぬ」(海老名弾正、我が信教の由來の經過、58ページ)

いう時代が開国により日本が世界に視野を広げていった時代であるが、海老名の熊本行は、従来の柳河12万石城下での生活が全てであった少年を54万石の広い世界、日本という広い視点、さらに英語を通して世界を、科学を通して宇宙を知るところへと導いた。そして、それはまた従来の柳河藩の藩主を「君」とすることから、世界の創造者、天地宇宙万物の創造者なる神というキリスト教の神を受容する素地にもなった。

まず、柳河から熊本に行った時の様子を見ると、その距離は六十数キロであったが、旅行免状が必要で、藩境では藩札を両替したということである。「熊本に著くと、恰も外國に入つたやうに感ぜられ⁽¹⁴⁾た、ということであるから如何に彼がそれまで小さな世界に生きていたかがわかる。

海老名が熊本に行ったのは、1872（明治5）年1月であるが、熊本洋学校に9月1日に二期生として入学するまでの間、竹崎茶堂の塾で漢学を学び、その後洋学校の子備校で勉学した。この時期の出来事として、神観に関連するもので大切なことは、茶堂塾で「天」の理解を深めたことである。

茶堂先生の講義を聞いて、少なからず啓發されたが、中にも一つ大いに益した事がある。それは天の説明であつた。朱子は、天は理なりと云つたが、小楠先生は、天は活物である、活物として考へよ、と教へたと、茶堂先生が述べた。これは、予に新しく聞えた。予は、これで行かねばならぬとて、天は活物であるといふ考方が、光明を與へた。⁽¹⁵⁾

1872（明治5）年9月1日、海老名は熊本洋学校に入学した。熊本洋学校は、薩長土肥に遅れをとった熊本藩が「その恥辱を取り返へさん為に青年の教育を企て、外国から教師を迎へて設立したものである」⁽¹⁶⁾

熊本藩では、招聘した Janes には、いわゆる「西洋器械之術」を教育してもらい、道徳に関しては、儒教をあてる予定であった。ところが、Janes

(14) 渡瀬常吉、前掲書、48ページ。

(15) 同書、66ページ。

(16) 三井久、海老名先生の包國家的基督教、「基督教研究」22巻1号、1946年3月、36ページ。

が宣教師ではなかったものの、熱心なキリスト者であったことと、西洋の文化がキリスト教と密接に関連していることから、科学教育と同時にキリスト教に基づく道徳教育をも行なった。この洋学校に、海老名は二期生として入学したのである。

入学した当初の海老名の西洋やキリスト教に対する知識は、皆無に近かった。洋学校初年度の事として、次のようにのべている。

第一讀本を讀んで、アメリカ人にも道徳心がある事が判つた。今までアメリカ人には道徳心がないものと思つてゐたので、これは大發見であつた。第二讀本に、鳥にパン屑を與へる事が書いてあり、窓に來る鳥に物語る所があり、これでは日本人よりも西洋人の方が情深いかも知れないと感じた。『母鳥の胸を傷けるな』とも書いてあつた。斯んな事を日本人の母は、子供に教へなかつた。或る意味では、日本人よりも西洋人の方が高尚だとも思ひ、新しい人情の世界を見せてくれた。⁽¹⁷⁾

学生は、英語が理解できるにつれて、Janes より地理、歴史、算術、幾何学、論理学、天文学、科学を教えられた。これらの学科学習において God 受容の準備は着実に為された。とくに、科学の勉学を通して、天地宇宙の「創造者なる神」という概念を与えられた。Janes に学んだ一期生の小崎弘道は、Janes が「天文學その他理科學の立場から整然たる運行を保つ宇宙の驚異を語つて天地を統ぶる偉大なるもののある事を教へ」たと語つている。⁽¹⁸⁾ 海老名自身も、キリスト教を受容し得た大きな原因として、この時の科学教育をあげている。

後になつては科學は宗教に反するやうに見えたが、我々は寧ろ科學に依つて宗教に近いた。物理學を讀んで居る時に、聲の事があつた。聲が怎うして聞えるか。音波の作用である。一秒に二十四から聞え出して、高い所は三、四萬迄聞える。と云ふ事を讀んだ時に、さらば其以上の所は誰も聞か

(17) 渡瀬常吉、前掲書、80ページ。

(18) 同書、486ページ。

ぬか、以下の音は人の耳に入らぬか、誰の耳に入るのか。かく考へて、一種神秘の世界を指さし、音の世界は廣い、我々の聞く能はざるものを聞くものがありそうに思はれた。又化學に於ては何もかも法則である。一として偶然では無い。私は宇宙に法則があることを知つた時に、何とも云へない一種の尊敬を拂はざるを得なかつた。それから今の青年にはさ迄共鳴せぬやうであるが、非常に心を動したのは星學である。空にきらめく天の河は星の世界だと知つた時に、宇宙の無限が展開して來た。⁽¹⁹⁾

海老名は、儒教と自然科学によって God を受容する準備を整えられ、洋学校二年の秋、Janes 宅で開かれるようになった Bible Class に英訳旧新約聖書を与えられて出席することにより、直接 God を知ることになる。時は、1873（明治6）年であり、この年の2月19日に切支丹禁制の高札が撤廃されたばかりの時であった。

小崎弘道は、Janes が自宅で Bible Class を開くに到つたのは、彼が「歐米の歴史を説いて、歐洲文明が一はギリシヤの文學、學問、一はローマの法律、政治併せてユダヤに興つた道德の感化があつて歐米の文化が成立つた、その歐洲諸國の歴史、殊に文學研究にはバイブルの知識がなければならぬ、然し課程に加へる事は出來ぬから有志の人に自宅で教へる、と云ふ事になつた⁽²⁰⁾」ということからであるとしている。当然学生の中には、キリスト教は邪教だということで出席しない者もいたが「教は良くないかも知れぬが研究するだけなら構はぬだらう、英語、英文の訓練のために必要だと認められる⁽²¹⁾」として、英語の理解できた者は多数これに出席した。「中でも進んで出席したのは海老名君で⁽²²⁾」あつたと小崎は語っている。

この Janes 宅の Bible Class への出席と英訳聖書を読むということで、キリスト教への関心も高まり、知識も深めたが、当初海老名には、自分が養

(19) 「我が信教の由來と經過」54, 55ページ。

(20) 渡瀬常吉, 前掲書, 486ページ。

(21) 同 書, 487ページ。

(22) 同 書, 487ページ。

はれた儒教思想とキリスト教とでは、あまりにもかけ離れており、キリスト教はとても受容できるものには見えなかった。彼が感じた両者の相違は次のようなものである。

我は基督教の博愛主義と日本の忠孝との衝突を看取して、基督教を邪教と見たのである。又儒教の現實主義は我をして基督教の來世觀を迷信と罵らしめたのである。基督教は利を以て人を導き、儒教は義を以て人を導く、基督教は奇跡を信じ、儒教は怪力を語らず、基督教は祈禱をなし、儒教は正道を賤み、人事を盡して結果を顧みない。而して基督の神が不可思議にして、人事に没交渉と認められたのである。聖書は一種の古傳説にして、信ずるに足るもの甚だ少しと思うた。⁽²³⁾

このように当初は多くの点で、儒教とキリスト教は相違するかのような印象を持ったが、その後さらに深く両者を学び、儒教で説く「天」「上帝」がキリスト教の God と類似している点に気付いてから、キリスト教受容への道が開ける。すなわち、茶堂塾で教えられた「天が活物である」という「天」の理解が深められ、それとの連続において God が認識されるようになる。

「近思錄」に、『君子は、當に終日天に在るに對すべし』と記してある。他の所には、『敬せざる勿れ。以て、上帝に對すべし』とも記さる。天を上帝と云へば、考方が具體的になる。「論語」に曰く、『罪を天に獲れば禱る所なし』と。横井小楠は、「宋の朱子」から出發して、「四書」に遡り更に「五經」に至つて、遂に天に到達した。天を、上帝に人格化し、天が我が心を見、天が我を保護する。「書經」に、『天の明命を顧る』とある。小楠曰く、『堯舜三代の心を用うるを見るに、其天を畏るゝこと、現在天帝の上に在せる如く、目に視、耳に聞く。動容周旋、總て天帝の命を受くる如く、自然に敬畏なり』云々と。予をして、天に向はしむる指南となつた。⁽²⁴⁾

儒教の天は、朱子の註である理性以上に、何か有りそうに思はれて來た。

(23) 「基督教新論」79ページ。

(24) 渡瀬常吉、前掲書、90ページ。

それが西洋で云ふゴッドと云ふものではないかと思はれた。そして天が段々と生きて来た。⁽²⁵⁾

研究を積むに従つて、是等の正反對と思はれた思想は漸く調和し始めたのである。基督教の神は儒教の上帝、天、活ける天と大抵一致したやうに考へられた。⁽²⁶⁾

このように、儒教で説く「天」「上帝」と God が一致、結合すると考えることによって God を承認するようになった。しかしこの時点では、知識的、概念的に God の存在を認識、承認するようになったものの、ハートで受容することはできなかつた。それが祈禱の問題という形であらわれた。海老名は、God の存在は認め得ても、礼拝するとか祈ることはできなかつた。とくに祈禱は、迷信であり、不合理であり、卑屈であり、君子の為すべき事でないと思つていた。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾

しかし、この God を心から受容するのに妨げとなつていた祈禱の問題も、やがて苦悶の後に解決された。その解決方法は、武士道、儒教との断絶、否定の上で受容する方法でなく、あくまでも武士道、儒教との連続、延長線上で受容する解決方法であつた。

明治八年三月の第一土曜日の夜は、予の一生涯にて最も大関係のあつた夜である。予は、今まで精神上の苦悶を経て、神の存在を認めて来た。唯だ解決しない所は祈禱である。然し祈禱を認めないから、神を認めても、神との縁が結ばれなかつた。土曜日の夜、予は何時もの如く、聖書を輪讀せんが為、ヂェーンズ宅へ赴いた。(略)ヂェーンズは、聖書を讀み終ると、莊嚴なる態度を以て、『今夜は、祈禱に就いて一言したい』と述べた。予はかねてより聴きたい題目であつたから、満腔の熱心を以て、耳を傾けた。

(25) 「我が信教の由來と經過」55ページ。

(26) 「基督教新論」79, 80ページ。

(27) 「我が信教の由來と經過」55ページ。

(28) 「基督教新論」80ページ。

(29) 渡瀬常吉、前掲書、95ページ。

ヂェーンスは肅然として曰く、『祈禱は、我々の職分である。創造者に對するオブリゲーションである』と述べた。職分とは、予にとり霹靂一聲であつた。窓から部屋の中へ、光明が來たやうに感じた。雷が頭上に落ちて、予は微塵に碎けた心地した。あゝ、祈禱は職分であつたか。私は、職分を怠つてゐましたか。祈禱が職分なら、膝を折り、骨を碎いても、祈らねばなりません。今まで祈禱しなかつたのは、済みませんでした。悪かつた。私は罪人であります。申わけがありません。御免し下さいと祈つた。僅かの瞬間であつたが、精神上の働きは疾風迅雷で、過去の自己は根柢から覆へされた。予は中心から祈つた。ヂェーンスは、『第二に、祈禱は神との交りである』と云つた。予は驚愕した。神との交りとは、何と有難いものではないか。今まで予は、智者識者との交りを求めた。天子様の御言葉を戴きたかつたが、親しく上帝に交り得るとは、何と高大なる恩徳ではないか。神は宇宙の主宰である。これと交はるのが祈禱であるかと、平身低頭してゐた。予の魂は青草が慈雨に浴する如く、伸び上つた。始めて神を仰(30)いだ。

このようにして祈禱の問題が解決することにより、彼と神との間に「電線(31)がかけられた」。この時以來「何事でも、神に伺ひ、神意を旨とするに至つた。予は神の僕となり、君臣の關係が、神と自分との間に成立した(32)」といわれる。また「神を主君として私の職分を自覺した時、初めて良心がオーソリテイ(33)を得た。非常に嬉しかつた。これは私の生涯に於ける新生である」ともいわれる。

「君の馬前で死ぬ」「忠君」が、価値観、倫理の中心であり、「君」を求めていた海老名には藩主に代る新しい「君」として、God が受容されたのである。「神は君で、私は臣である。君臣の道徳的關係である。従つて私は忠

(30) 渡瀬常吉、前掲書、95、96ページ。

(31) 同書、97ページ。

(32) 同書、97ページ。

(33) 「我が信教の由來と經過」58ページ。

臣として神に仕へんとした⁽³⁴⁾。これで理解できるように、キリスト教の唯一人格神が、儒教の「天」「上帝」、武士にとっての「主君」と連続するものとして把握されたところに、その受容の特徴があるといえる。ただ注意しておかなければならないのは、God を「主君」として受容するのは、海老名一人のユニークな受容方法ではないことである。というのは、明治初期に薩長土肥の藩士でない武士が多くキリスト教を受容したが、それらの人々に共通していたことでもあったからである⁽³⁵⁾。

海老名が Janes より受洗したのは、洋学校卒業を目前にした1876（明治9）年6月1日であった。彼は後になって、この時期のキリスト教受容は、「信仰の入口⁽³⁶⁾」であったとしている。

4

熊本洋学校はエリートが行く学校であり、当時の多くの塾と比較すると施設、内容ともに格段に秀れたものであり、その卒業生は国家の発展に指導者として尽くすべく期待された人材であった。その卒業生達が集団で、創立間もない同志社に行き、聖書、神学を学ぶことになった。これは全くの方向転換のようにみえるが、彼等自身は、政治の世界で活躍することと、宗教の世界で活動することには、相違がないと考えていた。というのは、政治の目的は究極的には倫理五常を国民に守らせることにあり、宗教は政治よりさらに直接的にその目的を達成することになると考えたからである。それゆえに、神学を勉強することになったとはいえ、その胸中には、政治を志していた時と同様国家、愛国ということが変わらずにあった。

(34) 「我が信教の由來と経過」, 60ページ。

(35) 一例として本多庸一の場合を挙げる。「欧米は兎も角我が日本にては、父申す言葉と君と申す言葉程もよく知るものはあるまい。天にある神様をば親として孝を尽せ、十字架に釘づけられた救い主をば己の殿様として、御主人と申して忠義を尽せよと申さば、誰も直ちに合点が行き、忠孝の二字に慣れたる有りがたき感情も湧き出づること、さして骨の折れることにあらざるなり。「高木王太郎編『本多庸一遺稿』大正7年」（大内三郎、日本キリスト教思想史における「伝統」の問題、季刊日本思想史、No. 6、ベリかん社、1978年、100ページ）

(36) 「我が信教の由來と経過」60ページ。

海老名は将来、宗教、教育で国家の発展に尽くそうと決心して、キリスト教を専門的に学ぶため同志社に来了。しかし、洋学校を卒業した時点でのキリスト教理解は、God を主君として受容し受洗こそしていたものの、深いものではなかった。一例を挙げると「我々はキリスト教が孔子釈迦よりも優等の人であると信じたかつたが、証明し得なかつた⁽³⁷⁾」とのべていることにもそれはよくあらわれている。さらに、師の Janes が宣教師でなく、ピューリタンではあったが、聖書解釈などでは必ずしも正統的でなかった面もあり、海老名のキリスト教理解も正統的、保守的でない点があった。たとえば「バ⁽³⁸⁾イブル全部を天啓として受取ら⁽³⁹⁾ず、「四書五經の中にも天啓はあると信じ⁽⁴⁰⁾」、旧新約の記事の中で科学的に証明し得ないものは除去しようというものであった。

このような背景をもって同志社に学ぶことになった海老名達は、当初ファンダメンタルな聖書解釈をする教師の宣教師との間にギャップを感じて煩悶したりもした。しかしその後、学生達は神学を組織的に学びキリスト教への理解を深め、宣教師達は日本の精神的伝統への理解を深めることによって、両者のギャップは徐々に埋められていった。それでも贖罪などの重要な問題について、最後まで相方で理解し合えない問題もあった。それは、後に海老名をして「日本的キリスト教」という類型を成立させる根拠ともなった。

海老名は、先述のように日本の国を神の聖旨に合うような国にするため布教しようという野心に燃えて神学研究に励んでいたが、1878（明治11）年7月に、過労などから、失明の恐れがあると診断された眼病になった。この出来事が、海老名の神観に新たな飛躍を迫る契機となった。

眼病により、読書も不可能になり、ただひたすらに自己の内面を見つめ、未来に対する不安を抱くということになった。この試練の時は数ヶ月にも及

(37) 渡瀬常吉、前掲書、130ページ。

(38) 同書、130ページ。

(39) 同書、130ページ。

(40) 同書、131ページ。

ぶものであった。この間、彼がもっとも苦悶したのは、God を主君として受容し、神の前に忠臣義士として仕えるために神学を勉強し、布教活動しようとしていたのに、その夢が断たれようとしていることにあった。ここに到って、God を主君とする限り、忠臣たり得ない自分は全く無意味となるということになり、改めて神を主君とする考えそのものが反省されることになった。そして、さんざん苦悶した末、God を父、自分を神の赤子とする新たな神と自己の把握によって、この危機は乗りこえられた。

それでは、この君臣から父子への移行は、どのようにして為されたのであろうか。直接的には眼病が原因となっているが、思想的には罪ということが契機になっている。海老名は、God を主君として受容する前にも、儒教で教えられた私心と本心ということから両者の渦藤を内に経験しているが、キリスト教を受容して、キリスト教の理想に接することによって、私心、利己心が深く神に背く罪と理解されるようになっていた。しかし、その罪理解はあくまでも観念的、抽象的であった。というのは現実には、彼は名誉、権力への野心を捨て、禁欲生活によって肉体の欲望も断ち、専ら God を主君として生命を捧げ、神の事業に携わろうとしていたので、自分が罪人であるという実感がなかった。

ところが、眼病になって明らかになったことは、神の事業に従事することそのものは罪でないものの、眼病でその見込みがなくなってこれほど煩悶するということは、自分に私心、利己心としての神の事業遂行ということが存在していたことが暴露されたことである。このように考えると、結局自分は神に全てを捧げていたのではなかった。実際には、私心、利己心に包まれた罪惡の固まりであったと自覚された。そして、遂には「最後に自己のすべてが否定せられ何も残らぬことになって了つた⁽⁴¹⁾」というところまでいった。

しかし、この追いつめられ、絶望の淵に行んだ時に、一筋の光明に接した。海老名は、祈禱問題を解決した時の体験とともに、これを二大体験として次

(41) 渡瀬常吉、前掲書、108ページ。

のようにのべている。

それなら自分の中には何にも取り所が無いかと探した所唯一つある。神を慕つて神の思し召しに叶ひたいと云ふ一念である。これは確に一片の誠である。これだけは罪ではない。他は悉く罪であると感じた。而して神が御前には何にも與へない。唯自分を與へるだけであるが、それでよいかと尋ねられた時に、私は十字架につけられた。ゲツセマネの祈を私も祈つた。願くば、此杯を取り去り給へと祈つたが、遂に御心に委せ給へと云ふに至つた。かくて此世に於ては精神的にも、肉體的にも絶望である。そして唯神を慕ふ一片の誠が残つた。(略) 總てのものは悉く取りあげられて、此心のみ許された。赤子の心が自覺された時に、宇宙の神である上帝は變じて、父となり給ふた。此自覺は尊く有り難い。それ迄にも私は神を父と云はぬでは無かつたが、眞の味はなかつた。其刹那から私の中に忠臣義士が無くなつた。生涯を神に捧げて、神の御事業をやると云ふ男は十字架で死んで、唯神を慕ふ一片赤子の心のみが残つた。⁽⁴²⁾

この君主から慈父、臣から神の赤子への移行は、倫理から宗教への移行ともいうべきものであった。そして注目すべきことは、海老名においては、倫理と宗教が断絶、対立するものとして把握されず、直結、連続するものとして捉えられていることである。そのことは、罪惡の固まりとまで自己を追いつめ、自分自身には救いの可能性がないものと一度は思う所に到りながら、神を思う赤子の心、一片の至誠を自分の中に発見して立ち直るところによくあらわれている。この神の赤子の心は、誠であり、良心であり、倫理の基盤となるものであり、同時に神と結合する根拠ともなるものである。赤子の心、良心によって神なる父と結合し得るといふ考えには、罪による神との断絶とか、キリストによる十字架の贖罪という考えはない。

海老名は、やがて眼病も回復し、1879(明治12)年6月12日、第一期生として同志社を卒業した。

(42) 「我が信教の由來と経過」67～69ページ。

これまでの、海老名が God を主君として、次いで父として受容したということそのものには、とりたてて異端とされたり、ユニークとされるほどのものはなかった。ところが、卒業後、安中、東京、熊本、京都で牧会、教育に従事し、1893（明治26）年9月に神戸教会牧師に就任した時には、海老名は正統派の人々からは異端と目されるようになる。牧師就任に際しては「異端邪説の唱導者」として、信者の内に反対する者があった。また、神戸教会に就任して約半年後の1894（明治27）年3月発行の「六合雑誌」に執筆した「基督の教」に対しては、直ちにその内容に問題があるとして、翌月号に神学博士エム・エル・ゴールドンが反論を掲載している。⁽⁴⁴⁾海老名自身も、保守的信仰者による「私に對する反対は、抑々私の神戸教會時代からである」といっていることから、神戸教会就任前後数年に、正統派、保守派といわれる人々からは、異端とされる彼のユニークな立場が明確になったと思われる。

海老名が、その時期に彼独自の神観を確立したのには、時代の影響が大きいことも見逃せない。魚木忠一は「神學的覺醒は明治二十一、二年を中心とする前後の數年に起り、この時に初めて、日本の基督者特に指導者は神學を學的問題として反省した」と記しているが、その契機となったものとしては、⁽⁴⁶⁾二つのことが指摘できるであろう。

一つには、1885（明治18）年「普及福音宣教同盟」（Allgemeine Evangelisch Protestantische Missions Verein）から、スイス人 Wilfred Spinner が宣教師として来日し、雑誌「真理」を発行し、新神学を紹介したことと、1887（明治20）年、アメリカ、ユニテリアン協会代表 A. M. Knapp が来日し、自由神学を導入したことである。両者は「新神学」「自由神学」

(43) 渡瀬常吉、前掲書、214ページ。

(44) エム・エル・ゴールドン、「基督の教」を読む、六合雑誌、第160号、1894（明治27年）4月。

(45) 渡瀬常吉、前掲書、240ページ。

(46) 魚木忠一、宮川經輝先生と日本基督教神學、基督教研究、21卷1号、1944（昭19）年4月、3ページ。

と呼ばれ、ともに三位一体論、イエスの神性を否定し、合理的にキリスト教を理解するものであった。この新しい教えが伝えられることによって、従来通り伝統的保守的にキリスト教を理解するか、自由主義的キリスト教理解を選ぶか、二者択一を迫られた。熊本洋学校以来の同窓生金森通倫と横井時雄が、この新神学の影響を受けて牧師職を辞したのをみても、その影響が如何に多大であったかが察せられる。

第二の契機としては、この時代に伝統的思想を再評価する風潮、さらにそのこととも関連して生じた教育と宗教の衝突問題が起り、キリスト教と国家、伝統思想との関連が問われることがあった。

このような時代の風潮からの影響を多大に受けつつ形成された、海老名独自の神観とはどのようなものであったか。

海老名は、自分の宗教思想の根源には、先に体験された神を父とする神子の意識がありこれを中心にして従来の神学を考えるようになった時、正統的とされる神観との間に、相違が生じてきたという。彼がもっとも正統派の人々から異端視されるようになったのは、三位一体論の解釈においてであつた。⁽⁴⁷⁾海老名は、入信以来この問題には悩まされ続けたという。

予は基督信者となりし當時より、三位一體の教義が念頭に浮ぶごとに未だ會て一種云ふべからざる苦痛を感じないことはなかつた。予が微なる智力は此教義を解せんが為にあらゆる考慮を用ひ盡くして窮境に陥つたこと屢々であつた。⁽⁴⁸⁾

この彼を悩ませた三位一体の問題は、キリストの神性という問題であった。当時、新神学、自由神學が導入されたこともあり、キリスト理解には、二つの異なった見解があった。一つは、ユニテリアン主義によって代表される、キリストの神性を否定する立場であり、他は、正統派によって代表されるキリストの神性を強調する立場であった。

(47) 「私は三位一體論に就て異端となつた」(『我が信教の由來と經過』75ページ)

(48) 渡瀬常吉、前掲書、258ページ。

海老名は、この二つの立場はともに、キリストは「真に人であり、真に神である」という立場の一方のみを強調する偏見であるとした。⁽⁴⁹⁾ 彼は、キリストは神にして人、人にして神である、と正統派の人々と同様に信じたのでユニテリアンではなかった。しかし、正統派、保守派といわれる人々が、キリストの神性を強調して「基督は絶対である。我々とは類が違ふ。彼は天上より降り、我は地より来たもの」⁽⁵⁰⁾と考えるのには、同意できなかつた。彼の神子の意識の体験から考えると、キリストの神子の意識とは大いに共通するものがあり、キリストをことさらに超人としていくことには納得できなかつた。

基督は父といふ名を假り來つて、その神觀の内容を言ひ表はされたのである。神の父たることは一方に人の子たるを意味する。基督は父我に在り、我れ父に在りといはれたのであるが（ヨハネ傳10の38）、この神を父と叫ぶ心霊の内容には、神と人が父子の親しき関係あるを意味する。⁽⁵¹⁾

ナザレのイエスを他人とは思へぬ。彼は兄である。我は弟である。彼は神我は罪の子と見る事は出来ぬ。⁽⁵²⁾

基督の生命とクリスチャンの生命とは同一源にして、又同一であらねばならぬ。是れ彼がクリスチャンの兄弟にして、その長子たる所以である（羅馬8の29）。⁽⁵³⁾

そこで、次に問題とされなければならないのは、では、彼は贖罪の問題をどう考えたか、ということである。というのは、正統派、保守派の人々によって、キリストが、神の化身、ロゴスの化身、仲保者としてその神性が強調される背景には、贖罪者キリストということと、原罪を荷う人間という考えがあるからである。

(49) 「基督教新論」95ページ。

(50) 「我が信教の由來と經過」75ページ。

(51) 「基督教新論」133、134ページ。

(52) 「我が信教の由來と經過」74、75ページ。

(53) 「基督教新論」90、91ページ。

海老名は、原罪とか罪惡を荷う人間、という立場を強調しなかった。彼は「海老名は罪惡を説かないと云ふが、私に罪惡の經驗が無いのでは無い。人並以上に苦い經驗をした為に、私と同様の經驗をさせるのに忍び無いのであ⁽⁵⁴⁾る」とのべているが、彼の人間觀の根本には、原罪や罪惡を荷う存在としての人間を強調する立場はなかったといえる。そのことは、何よりも神の赤子の意識ということによくあらわれている。どこまでも、神の似姿として神に連続するものを持つ人間、という考えが中心にある。それゆえに、彼の人間觀は、樂觀的、性善說的である。大塚節治は、彼の人間觀が樂觀的であるのは、その性格からもきているとしている。⁽⁵⁵⁾ 筆者は、そのような性格もさることながら、儒教、神道の人間觀からの影響も多大であると考ええる。日本では、孟子の性善説が正統とされ、荀子の性惡説は異端視されてきたという伝統があり、儒教を高く評価し続けた海老名にはこの伝統の継承が考えられる。また、この時期に研究を深めた神道も、罪汚れを外的なものとして、人間の本質として捉えないので、それへの共感も考えられる。

海老名は、もとより罪の事実を認めているが、それは、あくまで相対的のものであって、絶対的なものとは見なかった。そのことは、次のような言葉にもよくあらわれている。

罪惡は物質に固有するものにもあらず、無窮に存在するものにもあらず、人格の發育する途中、靈肉の戦闘に起因するものである。肉慾、邪慾、私慾が勝利を得る所には罪惡の意識を生じ、靈能の勝利を得る所には靈人の自由あり自主あり、而して罪惡はないのである。⁽⁵⁶⁾

罪惡は「人の宗教心を深遠ならしめ、人をして神にあこがれしむる」⁽⁵⁷⁾ために必要であり、人が神を父として受け入れ、神の子となれば、消滅するもの

(54) 「我が信教の由來と經過」70ページ。

(55) 大塚節治、海老名先生と贖罪論、基督教研究、22巻1号、1946（昭和21）年3月、47ページ。

(56) 「基督教大觀」130ページ。

(57) 同書、134ページ。

である。それゆえに、彼は罪の消滅の根拠として基督の十字架を考えない。「基督の十字架の血を見なくては赦されないと云ふのは、クリスチャンの神ではない」⁽⁵⁸⁾し、「基督の十字架は罪人を撲滅せんとする所の神怒を宥むる所以ではない。罪人のために自から犠牲となり、人を罪より救ひ出す至誠である。この至誠は神の愛に根ざすものにて、基督は之を實現したのである」⁽⁵⁹⁾とする。

海老名は、罪が神への反逆であり、キリストの十字架が、神の怒りを除く道であることは認めるが、⁽⁶⁰⁾十字架の中心はあくまで神の愛のあらわれということであり、神の審判、刑罰、怒りのためのものとは考えない。大塚節治は、海老名の「贖罪信仰には罪惡の征服を中心とする相と神への類似接近を中心とする相との二構相が顕著であり、而して後者が中心となつて居るが第三の構相たる神人の和解を中心となす相が影をひそめて居る」⁽⁶¹⁾とのべているが、筆者も同感である。

では、キリストは、神の化身、仲保者、和解者ということが根拠になって、神とされるのでないのなら、海老名にとっては、唯一人格神としての God とどう関連すると考えられたのだろうか。海老名は、キリスト教の God には、超越神の一面と、「神は萬有の上であり、又萬有を貫き萬有の中にあり」⁽⁶²⁾という遍在神（内在神）の二面があると考えている。前者のみを強調すれば、ユダヤ教、イスラム教の神観となり、キリスト教の神観にならないし、後者を強調すると、汎神論になってしまい、これもキリスト教ではなくなる。キリスト教の God は、あくまでこの二面を持つものでなければならぬとした。そしてキリスト教は、「父は我に在り、我れ父に在る」との意識によって、神人合一、超越と内在を包含する God への道を開いたとする。

(58) 「我が信教の由來と經過」75ページ。

(59) 「基督教新論」169ページ。

(60) 同書、169、170ページ。

(61) 大塚節治、前掲書、55ページ。

(62) 「基督教大觀」121ページ。

海老名の「日本的キリスト教」を、神観に限ってその「日本的」ということを考察するならば、キリストによって明らかにされたこの超越、遍在の両面を持つ God が、「欧米型」では超越のみが前面に出され、とかく遍在が軽視されることから生じたといつてよい。日本人キリスト者は、神儒仏の多神的、汎神的伝統に養はれているので、超越神のみの God であれば断絶、非連続で受容できない。God にある遍在神に連続、調和するものを見出して超越神をも受容できるのである。それゆえ、「日本的キリスト教」は、一方では神儒仏と連続、調和し、他方では、キリスト教の純粹性も保持しているとの確信から唱えられたものである。そして、世界には多神、汎神教の伝統に生きている人々が多いから、その人々に説かれるべきキリスト教は「日本型」であって、排他的な「欧米型」ではないとした。⁽⁶³⁾

海老名は、明治20年代末に自分の神観が確立したとは述べていないし、ここで引用したのも後年のものであるが、基本的には、明治20年代に書かれたそれほど多くない論文、説教の内容と後年のものには差がないので、彼の「日本的キリスト教」は、この頃に確立したとみたい。

6

日本人はその改宗を以て黒から白へと偽から眞へと又悪から善へと移りたるものとは考へなかつた。彼等は基督教を以て神儒佛よりもより完全なるものと信じ、神は獨リユダヤ民族をのみ顧みたるにあらず、諸國諸民をも顧み給ふものと論断するを以て最も公平なる見解と見たのである。⁽⁶⁴⁾

海老名のこの言葉に、彼のキリスト教、God 受容の基本がよく示されている。海老名は、キリスト教を「⁽⁶⁵⁾静的宗教と動的宗教」の両面から捉える。静的は神秘的面であり、動的は倫理的面である。海老名が神儒仏の伝統にとどまり得ず、キリスト教を受容したのには、倫理性、神秘性（宗教性）を併

(63) 渡瀬常吉、前掲書、222、223ページ参照。

(64) 「基督教大観」140ページ。

(65) 海老名弾正、静的宗教と動的宗教、大鑑閣、1918（大正7）年。

せ持つキリスト教への魅力ではなかったかと思う。神儒仏の伝統には、儒は倫理、神仏は神秘ということで分離があった。しかし、キリスト教の受容に際してその優越は認めたと、日本の伝統思想を否定することはしなかった。あくまでそれらとの連続、調和という観点から受容している。筆者のみるところでは、キリスト教の倫理面は儒教、神秘（宗教）面は神道と連続調和するものとして把握しているように思える。しかも、どちらかという、倫理面に強調が置かれている。⁽⁶⁶⁾ その意味では、彼のキリスト教は、故有賀教授が言っているように「倫理的良心宗教」であったともいえる。⁽⁶⁷⁾ このことは、彼が終生「洗礼を受けた武士」として生涯を完うしたことを意味する。

ただ最後に指摘されなければならないことは、海老名が神儒仏との調和、連続ということで、仏もその中に入れているが、仏教に対する論及や、積極的評価はほとんどないことである。これは、仏教を重視しなかった家庭環境、廃仏棄釈の時代の風潮、楽天的、人生肯定的性格、倫理の強調などからくるものであろうが、やはり、仏教思想への正しい評価、それとの調和がのべられなかったことは、大きな問題点といえる。

※ 当論文では、直接引用したところはないが、土肥昭夫「海老名弾正における儒教とキリスト教」(「出会い」NCC 宗教研究所、1967年)は、示唆するところ多い論文であることを記しておく。同教授には、個人的に海老名関係の資料についても御紹介いただいた。感謝の意を表したい。

※ 「六合雑誌」については、同志社大学人文科学研究所のマイクロフィルムを利用させていただいた。便宜を計って下さった同研究所に感謝の意を表したい。
(1983. 9. 30)

(66) 「基督教は神秘的分子を有すると同時に、ヨリ多く倫理的分子を有するのである」(「静的宗教と動的宗教」2ページ)

(67) 有賀織太郎、海老名弾正と希臘神學、基督教研究、21巻4号、1945(昭和20)年9月、69ページ。